

技 術 資 料
技 資 第 140 号

電線・ケーブルの荷造りに関する
環境調査報告書
(環境的考察と提言)

2006 年 9 月

社団法人 日本電線工業会

(産業用電線・ケーブル専門委員会荷造検討 WG)

目 次

	頁
1. はじめに	1
2. 電線の荷造りの現状	
2. 1 検討対象について	2
2. 2 ドラム	5
2. 3 タバ	11
2. 4 パレット	14
3. 環境配慮の視点からみた荷造りの課題	
3. 1 ドラム	15
3. 2 タバ	18
4. 環境配慮荷造りに関する提言	
4. 1 ドラム	21
4. 2 タバ	22
5. おわりに	23
引用・参考資料	32

1. はじめに

1997年の京都議定書(COP3)を皮切りに、一般的な環境問題が高まりを見せ、電線・ケーブル（以後「電線」と云う）についても環境問題が検討され始めた。1998年には建設省(現国交省)の「グリーン庁舎計画指針」に基づくハロゲン系物質を含まない「エコ(EM)電線」の提案があり、日本電線工業会規格(JCS)が制定され、2002年には日本工業規格(JIS)となり現在に至っている。

また、RoHS指令による有害化学物質の制限やリサイクルの推進など、電線に関しては熱心に環境問題が討議されてきた。その中で「電線の荷造り」については、電線を使用場所まで運ぶときの外傷防止対策のための道具であり、使用後には不要となるため製品とは切り離されて論議され、環境問題として取り上げられることは少なかった。

しかし、昨今の石油資源枯渇問題に端を発して、自然破壊や材料のリサイクル・リユース・リデュースのいわゆる「3R」の観点からの環境問題が論じられるようになり、さらには容器リサイクル法の施行などがいわゆる梱包材の環境問題が急激な高まりを見せ、電線の荷造り梱包材料についても「環境」という視点からの検討が望まれるようになった。

(社)日本電線工業会では、従来から「物流委員会」で荷造り問題についての議論をしており、また、技術委員会である「電線・環境技術小委員会」でも電線本体についての環境問題だけでなく、荷造りに関する検討も行ってきた。

このたび、環境という視点で電線の荷造り問題を検討すべく、両委員会の代表を含めた新メンバーによる「産業用電線・ケーブル荷造検討WG」を立ち上げ検討を実施した。

以下に検討内容と提言を報告する。